

地理的な見方・考え方を育むために地図帳をどのように活用するか～世界の国学習から～

千葉県 公立中学校教諭

1 はじめに

中学校社会科の授業が大きく変わろうとしているように思う。いや、大きく変わらなければならない時期にきていると言った方が正しいかもしれない。平成14年度から施行されている学習指導要領は、自ら学び、自ら考えるなどの「生きる力」の育成をねらいとしている。「生きる力」は、確かな学力・豊かな人間性・健康や体力によって支えられるものであり、文部科学省はこれを受けて、確かな学力向上のための2002アピール「学びのすすめ」を公表した。ここでは、

- ①基礎・基本や自ら学び考える力を身につける
- ②発展的な学習により個を伸ばす
- ③学ぶことの楽しさにより学習意欲の向上を図る
- ④学びの機会の充実と学ぶ習慣の定着
- ⑤確かな学力向上のための特色ある学校づくりの推進という五つの方策が述べられている。以上のように、学校教育（社会科授業を含め）への期待が高まる中で、我々は、今まで以上に幅広く、深まりのある授業を実践していかなくてはならないことになる。そのためには、これまでの授業を見直し、授業のスリム化をめざす必要があるように思う。スリム化といっても、何かを削ることだけではない。より効率よく社会科の基礎・基本（四つの観点）を生徒たちにバランスよく学ばせることにほかならない。

2 目標、指導、評価の一体化にむけて

暗記教科などといわれる社会科は、目標と指導、評価の一体化の観点からみると、大きく歪んだ形で一体化がなされているとっていいだろう。澁澤文隆氏は著書の中で、「知識は単なる暗記にとどまり、生きて働く力になっていない。これからの中学校社会科は、“あまり多くのことを教えることなかれ。しかし、教えるべきことは徹底的に教えるべし”というホワイトヘッド（イギリスの哲学者）の言葉を改めて噛みしめる必要があるだろ

う。そして、本来の社会科の姿を取り戻すとともに、これからの社会科がめざすべき学習指導の在り方などを検討し、“生きる力”を育むことに貢献できる社会科に改善していくことが課題になっているといえよう」と提言している。

私は、社会科授業において大切なことは、授業過程において、資料の読み取りや活用能力（読解力）をはじめ、思考力や判断力を育成し、適切に評価する場面を重視した授業づくりを進めることだと考える。つまり、社会科授業の四つの観点を基礎・基本ととらえ、バランスよく目標設定と授業づくり、そして評価を行い、その結果として、課題意識を持ち、主体的に学ぼうとする態度形成（生きる力の基礎）が身につくのだということを忘れないことが、これからの社会科教師にとって何よりも必要な資質なのではないだろうか。

3 地理の見方（資料を読む力）・考え方を育てる

「地理的な見方」をわかりやすく言えば、「どこに、何が、どのように広がっているのか」を読み取ることである。あえて、分析的に整理すれば、①各地の諸事象を位置や空間的な広がりの中でとらえ、地理的事象として読み取る。②地理的事象の規則・傾向性をその位置などを考慮しながらつかむ。と解釈してよいだろう。そして、その学習過程において、生徒が何らかの疑問や感想をもつことができればしめたものである。その課題意識を大切に育てながら、授業へのモチベーションを高められるからである。

「地理的な考え方」の基本は、「地理的事象が、なぜそこでそのようにみられるのか、また、なぜそのように分布したり移り変わったりするのか」を考えることである。つまり、

- ①地理的事象やその空間的配置、秩序などを成り立たせている背景や要因を、地域という枠組みの中で、地域の環境条件や他地域との結びつきなどと人間の営みとのかかわりに着目して追究

し、とらえること。

②諸地域を比較し関連づけて、地域的特色を一般的共通性と地方的特殊性の視点から追究し、とらえるとともに、地域の変容をとらえ、地域の課題や将来像について考える。

と解釈できるだろう。

このことに注目しながら、授業づくりをすることをコンセプトにした。帝国書院『中学校社会科地図（初訂版）』p.7～8は、地理的見方や考え方を養う上でたいへん有効だと考える。以下は、この地図活用をコンセプトを中国の学習に転移させた私の取り組みである。

今回、中国の気候の特色を北京の事象を例にとって学習する。北京の気候の特徴は、季節風の影響を受ける温帯湿潤的な気候であるという点において東京との共通性をもつが、黒潮の影響を受けないという特殊性を併せもつところにある。同緯度地方にありながら異なった事象がみられる。この点に注目して授業づくりを行えば、生徒の疑問を引き出すことができると考えた。このように、地理的事象における、一般的共通性と地方的特殊性を読み取らせ、そこにみられる不思議を導き出し学習課題として設定する。さらに、より広く世界を眺めさせ、空間的な広がりの中で、互いの国

や都市の位置関係を認識させるにはよい機会であるので、パリとモスクワも学習の対象にくわえ、世界の気候学習の特徴とその要因の学習を、凡例的に学習させたい。そして、中国の学習を中国のみの学習に終わらせることなく、より広く世界を眺め、社会科的な見方をつかませる。このような授業づくりは、学習のスリム化が図れるだけでなく、資料の読み取りや活用能力(読解力)、思考力・判断力の育成を念頭においた、目標と指導の一体化した実践になるだろう。

4 中国の学習で地理的な見方考え方を育てる

実践にあたって、ワークシートを用意した。学習のポイントを明確にすることで、効率よく学習課題を導き出すとともに、基礎的・基本的な学習事項をおさえた調べ学習を行うためである。

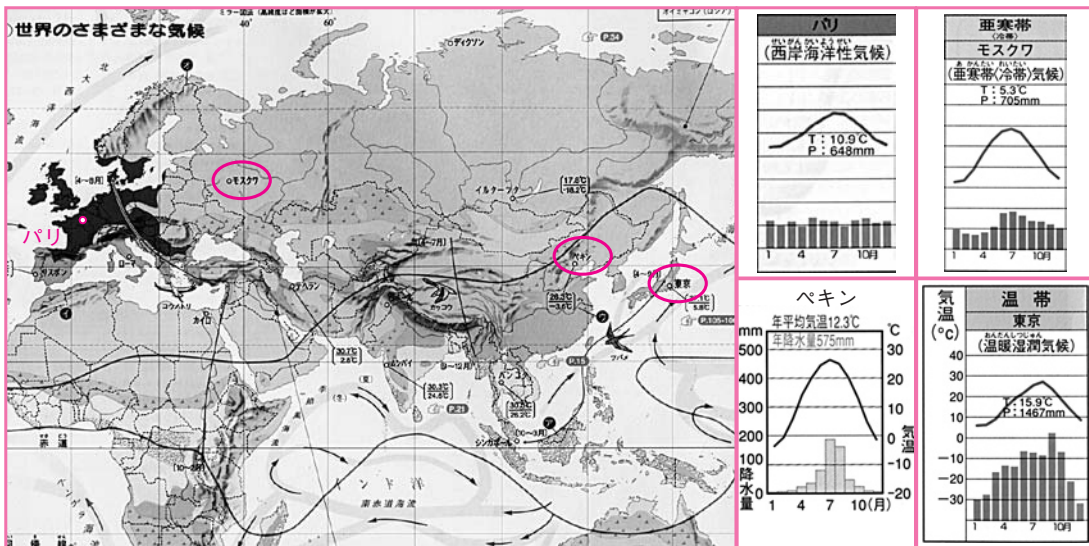
		気 温				降 水 量				
		パリ	モスクワ	北京	東京		パリ	モスクワ	北京	東京
最高	℃					最高	mm			
	月					月				
最低	℃					最低	mm			
	月					月				

○気が付いたこと、疑問に思ったこと

○課題に対する予想

○調査した結果

○世界の気候の特徴と、その中での中国の気候の特徴についてわかったことを書きましよう。



帝国書院『中学校社会科地図（最新版）』p.7、『中学校社会科地図（初訂版）』p.12、帝国書院『中学生の地理（最新版）』p.105

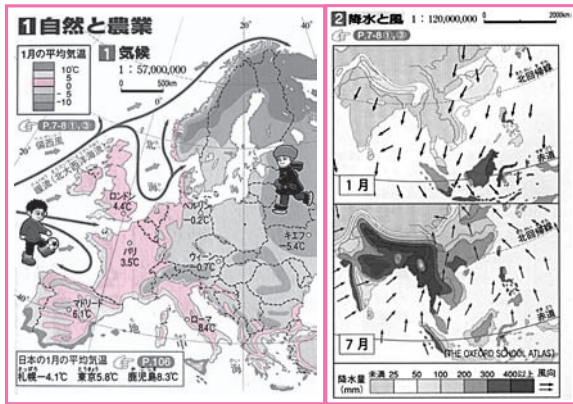
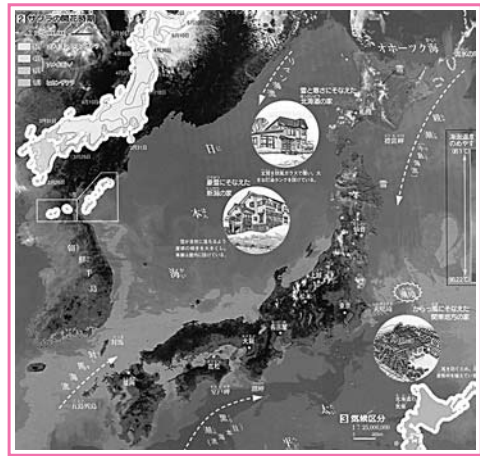
前記のワークシートを利用して、疑問（学習課題）を導き出すと、一般的共通性と地方的特殊性の区別はつかないながらも、「気温が下がるはずのない都市が下がり、下がるはずの都市が下らな

い原因はどこにあるのか？」と言う、疑問を導き出すことができた。

次に、これらの疑問に対する予想を考えさせる。このことで、その後の調査活動への意欲化を図る

だけでなく、既習状況も確認できるからである。
その結果をいくつかあげてみる。

- ア. 東京とパリは、温帯に属しているから、冬の寒さが厳しくない。
- イ. パリとモスクワの最低気温に差があるのはパリの近くには、暖流があるからだと思う。
- ウ. 同緯度なのに最低気温に差がでるのは、海岸が関係しているからだと思った。
- エ. 北京と東京が夏に降水量が多いのは台風の影響だと思う。
- オ. 中国では砂漠が広がっているので、東京と降水量に差がでるのだと思う。

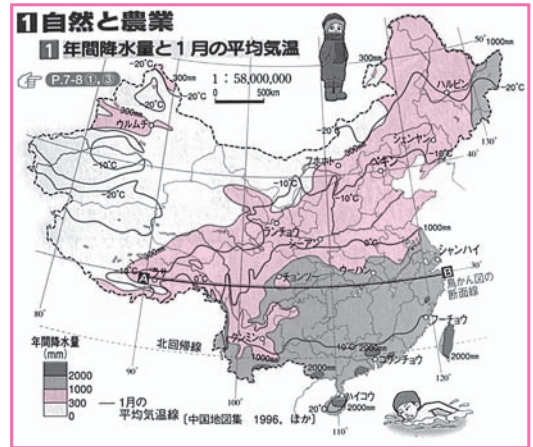


帝国書院『中学校社会科地図(最新版)』p.31、21

生徒たちは、資料Aを使って、ア・イ・ウの予想を立てた。またエとオは、これまでの既習内容をもとに考えた予想である。この予想が生徒のモチベーションを高め、生徒は意欲的に地理的事象の背景や要因の学習を進めた。

生徒が予想に対する検証に使った資料は資料F～Iであった。いずれの資料も資料Aの中に記載されている「[]p.〇〇」によってみつけたものである。この資料を基に検証した結果、次のような学習の成果が得られた。

- ①パリのほうがモスクワよりも最低気温が高いのは、パリの近くには偏西風が吹き、暖流の北大西洋海流があるから、冬もそこそこ暖かい。
- ②東京の近くには暖流の黒潮がながれているので冬の気温が低くならない。
- ③北京の冬はモンスーン(季節風)が吹き、東京のように近くを暖流(黒潮)が流れていないので、1月の気温が下がる。
- ④アジアはモンスーン(季節風)の影響を受けるので、夏に降水量が多く、冬に降水量が少なく



帝国書院『中学校社会科地図(最新版)』p.105、15
なる。

- ⑤中国は季節風の影響を受け、冬に冷たく乾燥した季節風が吹くので、気温が下がり降水量が少ない。また、夏には暖かく湿った季節風の影響を受けるので8月の降水量が多い。
- ⑥中国の内陸部は夏の季節風の影響を受けないのだから降水量が少ない。
- ⑦世界の気候は、さまざまな特徴があることがわかった。その原因になっているのは、風や海流であることがわかった。

以上のように、中国の学習を中国のみの学習に終わらせることなく、より広く世界を眺め、社会的な見方や考え方を育てることができた。

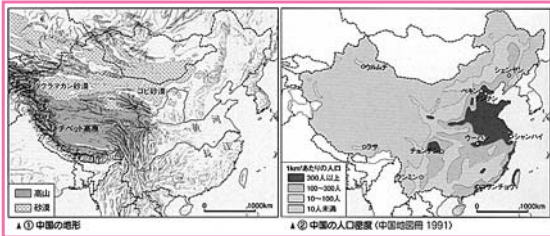
5 思考・判断力を高める

次に、フランスの人口と農業、工業の学習に関わる地図活用の具体的な例示をモデルにして中国の学習を行った。資料を読み取って事実認識を高めることだけに終わらずに、資料読み取り能力を

発展させて、思考力を高める工夫を試みた。

思考力を育てる場合、資料を2種類以上用意し、そこから何がわかるのかを考えさせることにしている。そうすることにより、生徒が資料を読み取る力と、思考力の段階的な違いを把握でき、学習のまとめや発表を行う際により幅広く資料を活用した表現活動にも役立つと考えるからである。

たとえば、下の資料Jは中国の地形と人口密度の分布を並べて載せてある。それぞれを読み取るだけでなく、双方を重ね合わせることで、思考を深めるのである。資料Kは生徒Sが描いた分布図である。ノートには、隣接する国の名前や点



帝国書院『中学生の地理(最新版)』p.102、生徒の分布図線の国境(未確定)が書き込まれている。Sの感想には、「砂漠や高原、山脈の近くは生活しにくいので人が集まらない、東側は平地で降水量も多く、大きな川が流れているので作物(食料)を栽培するのに適しているのだろう」と書かれてある。また、人口の学習も、新旧の地図帳のデータを使うと人口増加率まで求めることができる。

	人口(98)	人口(01)	増加率
中国	125,570	127,513	2%
インド	97,093	103,334	6%
日本	12,607	12,713	0.04%

次に、資料Lを見てSは、「漢民族が中国の食料

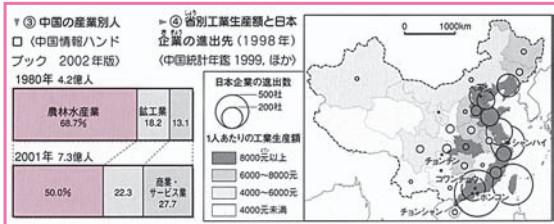
を作っている。南部の稲作は平地が広がり季節風の影響を受けるからだろう。中部は気温が低いので小麦が多い。西部は降水量が少なく、乾燥しているので羊を飼っている」と、自分で考え、考察をノートに書いている。

さらに、工業の学習では、「中国の人たちは、自然条件ではなく現

金収入の多い海岸線に集まりはじめている」さらに、「海岸線に人口が集中しはじめているし、農業をやっている人の割合が減っているので、農業をしなくなったようにみえる」「20年間で、農林水産業の割合は減ってるけど、人口が増えているから、農業をやっている人の数は増えていることがわかった」と感想を述べている。



帝国書院『中学生の地理(最新版)』p.106



帝国書院『中学生の地理(最新版)』p.106

6 おわりに

「確かな学力」を身につけさせる取り組みは、学ぶことの楽しさを生徒と教師が互いに実感し合うところにその原点があるように思える。資料を読み取り、活用することの楽しさを実感させる授業づくりには、それなりの時間と労力が必要になることはいままでのまではない。まず、指導者が「確かな学力」を身につけることへの努力を怠ってはいけないということなのだと思える。